

相対最上級形容詞における名詞限定辞の存在

川 島 浩 一 郎*

0. はじめに

相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* は、名詞限定辞記号素の実現形として記述されることが比較的多い。たとえば CHEVALIER et al.(1964), MARTINET (1979), ARRIVÉ et al.(1986), RIEGEL et al.(1994) は、これらの *le*, *la*, *les* を定冠詞記号素の実現形であるとする¹。ただし、一般的には、そのように判断するための根拠が明示的に示されることは少ないように思われる。

本稿では、相対最上級形容詞が条件変異体の関係にある事例を比較することを通して、相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* が名詞限定辞記号素の実現形であるかそうでないかを検討する。定冠詞記号素の実現形と同形であるからといって、これらの *le*, *la*, *les* が定冠詞記号素の実現形であるとはかぎらない。名詞記号素の実現形をかならずしも直接的に限定しないからといって、これらが名詞限定辞記号素の実現形でないともかぎらない。相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* が名詞限定辞記号素の実現形であるかそうでないかを判定するためには、表意単位とその実現形の関係により踏み込んだ観点からの分析が必要である。

* 福岡大学人文学部教授

¹ 相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* は、定冠詞記号素の実現形ではなく、原名詞限定辞記号素（すべての名詞限定辞記号素の共通部分）の実現形である。原名詞限定辞については、川島（2011d）や川島（2013）を参照。

(1) Paris est *la plus belle* ville du monde, [...]. (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.356)

(2) Pour eux, Paris est le nombril du monde. C'est la ville *la plus belle*, la plus animée, la plus branchée. (Internet)

(3) J'étais *la plus belle* de toutes. (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.109)

結論を先取りして言えば、相対最上級形容詞の一部分としての *le*, *la*, *les* は、名詞限定辞記号素の実現形である²。たとえば (1) や (2) における *la plus belle* の *la* は、名詞限定辞記号素の実現形とみなしてよい。したがって (2) の *la plus belle* と (3) の *la plus belle* を同一視してよければ、後者における *la* もまた名詞限定辞記号素の実現形だということになる。

1. 事実と概念・用語の確認

1.1. 表意単位の実現形としての認定基準

発話の切片 (X と記号化する) が表意単位の実現形であるためには、その切片 X が、少なくとも次の 2 条件を満たすことが必要である。(a) 文脈の一点で、X を他の切片 (ゼロ切片を含めて) と入れ換えることができる。(b) この入れ換えによって、発話の知的な意味に変化が生じる。「知的な意味」とは、*père* と *mère* の弁別のような、言語共同体の構成員が共有する客観的な弁別にもとづく意味のことである。たとえば (4) と (5) では、*côté* と *avis* を入れ換えることができる。つまり *côté* と *avis* が、条件 (a) を満たす。また *côté* と *avis* の入れ換えによって、(4) や (5) の意味に客観的な変化が生じる。つまり *côté* と *avis* が、条件 (b) を満たす。したがって (4) の *côté* と (5)

² 相対最上級形容詞の一部分としての *le*, *la*, *les* が、定冠詞記号素の実現形とは異なるふるまいを見せるのは、それらが原名詞限定辞記号素の実現形だからにほかならない。

の avis は、それぞれの文脈において、表意単位の実現形だと考えてよい³。

(4) [...], je suis de ton côté. (Marc Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.48)

(5) Je suis de ton avis. (Amélie Nothomb, *Antéchrista*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.67)

この基準に依拠しないかぎり、X (発話の任意の切片) が表意単位の実現形であるかそうでないかを明確に判定する手段はない。条件 (a) に反して、かりに (4) の côté を他の切片と入れ換えることができないと仮定しよう。この仮定は (4) の côté が発話の他の部分、たとえば ton から、分離不可能であることを意味する。発話の他の部分から分離できない切片を、自立した単位として認めることはできない。また条件 (b) に反し、(4) の côté を他の切片と入れ換えることはできるが、この入れ換えによって (4) の知的な意味に変化は生じないと仮定しよう。この仮定のもとでの côté を、表意単位の実現形として認めることはできない。たとえどのような切片を用いても (côté であろうが avis であろうが opinion であろうが) 発話の知的な意味に変化がないとすれば、それらの切片に表意機能を認めることはできないからである。

(6) Tom est le pire des flics, parce qu'il est *le meilleur*. (Tonino Benacquista, *Malavita*, Collection Folio, 2004, p.329)

(7) Faudra-t-il parce qu'il est *meilleur*, qu'il ait une plus forte part d'aliments que les autres ? (Internet)

なお X と入れ換え可能な切片には、いわゆる「ゼロ切片」も含まれる。ゼロ切片とは、切片が不在の状態を指す。X をゼロ切片と入れ換えかえることが

³ X (発話の任意の切片) が表意単位の実現形であるかそうでないかは、少なくとも原理としては、文脈ごとに検証されなければならない。ある文脈で表意単位の実現形であった X が、他の文脈で表意単位の実現形であるとはかぎらないからである。たとえば je suis ton avis における avis は表意単位の実現形であるが、ils sont ravis における avis はそうではない。

でき、この入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じれば、Xを表意単位の実現形として認定することができる。たとえば(6)における *le meilleur* の *le* は、(7)の *meilleur* がそうであるように、ゼロ切片と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって(6)の知的な意味に変化が生じる。したがって(6)において、*le meilleur* の *le* を表意単位の実現形として認定することができる。

1.2. 表意単位の実現形の境界画定

同一の発話中で共起する複数の切片(X, Yと記号化する)について、それらの間に表意単位の実現形としての境界があると言うためには、X, Yの両方が、少なくとも次の2条件を満たすことが必要である。(a) X, Yの一方を維持したまま、他方を(ゼロ切片を含めて)他の切片と入れ換えることができる。(b) この入れ換えによって、発話の知的な意味に変化が生じる。X, Yの間に表意単位の実現形としての境界があるのは、この2条件が満たされた場合だけである。X, Yの間に表意単位の実現形としての境界があれば、X(あるいはXを含む切片)とY(あるいはYを含む切片)が両方とも、表意単位の実現形としての基準を満たすはずだからである(1.1.を参照)。たとえば(8)における *du* と *courage* はどちらも、(9), (10), (11)にみられるように、他の切片と入れ換えることができ、その入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる。つまり(8)の *du* と *courage* は、それぞれが異なる表意単位の実現形である。(8)において、*du* と *courage* の間には表意単位の実現形としての境界があると考えてよい。

(8) *Allez, [...], du courage !* (Thierry Jonquet, *Mon vieux*, Collection Points, 2004, p.23)

(9) *Allez, courage !* (Maxime Chattam, *Le 5^e règne*, Collection Pocket, 2003, p.503)

(10) *Bon courage.* (Maxime Chattam, *La théorie Gaïa*, Collection Pocket,

2008, p.178)

- (11) Du *calme*, ne t'emballe pas ! (Maxime Chattam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.160)

X, Y のどちらか一方でも条件 (a) あるいは (b) を満たさなければ, X, Y の間に表意単位の実現形としての境界はないとみなしてよい. たとえば *il le faut* の *faut* は, 条件 (a) と (b) の両方を満たす. この *faut* は, *il le hait* のように他の切片と入れ換えることができ, その入れ換えによって *il le faut* の知的な意味に変化が生じる. しかし *il le faut* の *il* は, 条件 (b) を満たさない. この *il* は, ゼロ切片との入れ換えであれば可能である. つまり, 条件 (a) は満たす. ただし *il* をゼロ切片と入れ換えることによって, *il le faut* の知的な意味に変化が生じるわけではない. したがって *il le faut* の *il* と *faut* の間に, 表意単位の実現形としての境界はないと考えてよい.

1.3. 記号素の実現形と連辞の実現形

表意単位としての境界を内部にもたない表意単位は (1.2. を参照), 記号素と呼ばれる⁴. ようするに記号素は, 複数の表意単位を内部に含まない表意単位である. 最小の表意単位と言い換えてもよい. たとえば (12) の *Dior* は, 記号素 (最小の表意単位) の実現形である. (12) の *Dior* は, 他の切片と入れ換えが可能な複数の切片に分節することができないからである.

- (12) J'adore *Dior*. (Frédéric Beigbeder, *Au secours pardon*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.293)

- (13) J'adore *le cinéma*. (Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et*

⁴ 「記号素 (monème)」と「形態素 (morphème)」は用語として競合関係にある. ただし, 少なくとも日本語においては, 形態素よりは記号素のほうが優れた用語である. これらの用語の指示対象が, シニフィアンとシニフィエの両面を備えた言語「記号」だからである. 「形態」という用語ではシニフィアンしか表現できないため, 記号という概念との対応関係が不適切になる. また「形態」という用語で無理に「記号」を指示しようとするれば「形態論」と「記号論」が同じものになってしまう.

autres histoires, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.126)

一方、表意単位としての境界を内部にもつ表意単位は (1.2.を参照)、連辞と呼ばれる。つまり連辞は、複数の表意単位を内部に含む表意単位である。たとえば (13) の *le cinéma* は、記号素の実現形ではなく、連辞の実現形である。(13) の *le cinéma* は、*le* や *cinéma* を他の切片 (*ce*, *vin* など) と入れ換えることができる。また、この入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる。したがって (13) の *le* と *cinéma* の間には、表意単位の実現形としての境界があると考えてよい。

1.4. 表意単位とその実現形の非一対一対応

表意単位とその実現形は、一対一に対応するわけではない。男女差や年齢差、地域差、個人差、声の大きさ話す速さなど、音声的なあらゆる違いを考慮に入れば、同一の表意単位の実現形は無数に存在すると言ってよい。いわゆる異音同義や同音異義の事例もある。たとえば *assoyez-vous* の *assoyez* と *asseyez-vous* の *asseyez* のように、同一の表意単位が明確に異なる実現形をもつことがある。逆に *le Japon* の *le* と *je le connais* の *le* のように、異なる表意単位が (音声的な微細な違いを除けば) 同じ形で実現することも珍しくない。

したがって、同形であるかそうでないかという基準だけでは、複数の切片が同一の表意単位の実現形であるか異なる表意単位の実現形であるかを、判定することはできない。形が同じであっても、同一の表意単位の実現形であるとはかぎらない。また形が同じではないとしても、異なる表意単位の実現形であるとはかぎらない。同一の表意単位の実現形であるかそうでないかを判定するためには、形の異同以外の基準に基づいた分析が必要である。

1.5. 条件変異体の関係

複数の発話の切片 (X, Y と記号化する) が同一の表意単位の実現形であるとき、それらは変異体の関係にあると言われる。同一の表意単位の実現形は無数に存在するのだから (1.4.を参照)、変異体の関係にある切片もまた無数に

存在すると考えられる。変異体の関係にある切片は、明確に形が異なることもあれば、形に微細な違いしかないこともある（1.4.を参照）。

変異体の関係にある X, Y にみられる形の相違が、出現文脈の違いに条件づけられているとき、X, Y は条件変異体の関係にあると言われる。たとえば定冠詞記号素の実現形が *le* であるか *la* であるかは、定冠詞記号素が女性名詞記号素と共起するかそうでないかの違いに条件づけられている。したがって定冠詞記号素の実現形としての *le* と *la* は、条件変異体の関係にあると言ってよい。

2. 相対最上級形容詞における名詞限定辞の存在

2.1. 問題設定：名詞限定辞記号素の実現形であるかそうでないか

相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* が定冠詞記号素の実現形と同形であるからといって、これらの *le*, *la*, *les* が定冠詞記号素の実現形であるとはかぎらない。同形であるかそうでないかという基準だけでは、複数の切片が同一の表意単位の実現形であるかそうでないかを判定することができないからである（1.4.を参照）。実際、たとえば（14）における *la plus gentille* の *la* や（15）における *le plus italien* の *le* は、定冠詞記号素の通常の実現形とは異なり、名詞記号素の実現形に対する直接的な限定項となっているわけではない。

(14) Tu dois être la personne *la plus gentille* au monde. (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.47)

(15) Warren est sûrement *le plus italien* de toute la famille, [...]. (Tonino Benacquista, *Malavita encore*, Collection Folio, 2008, p.219)

(16) Il existe une grande quantité de *manières* de faire. On croit que *la plus courante* est de percer le cœur. (Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.257)

(17) *La plus urgente des mesures est d'empêcher le mort de marcher.*

(Fred Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.257)

ただし、名詞記号素（あるいは名詞に相当する表意単位）の実現形を直接的に限定しないという論拠だけでは、相対最上級形容詞の一部分としての *le, la, les* が名詞限定辞記号素の実現形ではないと断定することはできない。名詞記号素（あるいは名詞に相当する表意単位）の実現形を限定しない名詞限定辞記号素の実現形は、存在しておかしくないからである。たとえば (16) の *la plus courante* や (17) の *la plus urgente* は名詞連辞であるから、これらに含まれる *la* は名詞限定辞記号素の実現形であると考えてよい。ただし *la plus courante* や *la plus urgente* における *plus* の存在は、これらの連辞における *courante* や *urgente* が名詞記号素（あるいは名詞に相当する表意単位）の実現形ではないことを示している。名詞記号素（あるいは名詞に相当する表意単位）は通常、*plus* による限定を受け入れないからである⁵。また *courante* や *urgente* の形態が、*manière* や *mesure* の文法上の性に一致していることも、これらが名詞記号素の実現形ではないことを示唆している。よって (16) の *la plus courante* や (17) の *la plus urgente* に含まれる *la* は、名詞限定辞記号素の実現形ではあっても、名詞記号素（あるいは名詞に相当する表意単位）の実現形を直接には限定していないことになる。

したがって、相対最上級形容詞の一部分としての *le, la, les* が名詞限定辞記号素の実現形であるかそうでないかを判定するためには、別の観点からの分析が必要である。定冠詞記号素の実現形と同形であっても、名詞限定辞記号素の実現形であるとはかぎらない。また名詞記号素（あるいは名詞に相当する表意単位）の実現形を直接的に限定していないからといって、名詞限定辞記号素

⁵ (16) の *la plus courante* や (17) の *la plus urgente* においては、*plus courante* や *plus urgente* の全体を *la* の存在が名詞連辞に接近させていると考えられる。名詞限定辞記号素のこの用法については、川島 (2010) や川島 (2011c) を参照。

の実現形でないともかぎらない。本稿では、相対最上級形容詞が条件変異体の関係にある事例を比較するという手法を用いて、相対最上級形容詞の一部分としての *le, la, les* が名詞限定辞記号素の実現形であることを示す (2.2. と 2.3. を参照)。

2.2. 他の表意単位を限定する相対最上級形容詞における名詞限定辞

2.2.1. 相対最上級形容詞の前置と後置

他の表意単位の実現形を限定する相対最上級形容詞には、被限定項に対して前置される実現形がある。たとえば (18) の *le meilleur*, (19) の *notre meilleur*, (20) の *ce meilleur* はどれも、被限定項の *ami* に対して前置されている。このような最上級形容詞前置型名詞連辞を表すために、(Le + Mon + Ce) plus Adj. N. という記号を用いることにしよう。このタイプの名詞連辞に現れる名詞限定辞には、定冠詞記号素の実現形 (Le と略記する), 所有形容詞記号素の実現形 (Mon と略記する), 指示形容詞記号素の実現形 (Ce と略記する) がある。Adj. は、形容詞記号素 (あるいは形容詞に相当する表意単位) を表す記号である。また N. という記号は、名詞記号素 (あるいは名詞に相当する表意単位) を表す。

(18) *Le chien est le meilleur ami de l'homme.* (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.182)

(19) *Je vous présente notre meilleur ami, [...].* (Pierre Siniac, *Femmes blafardes*, Collection Rivages/Noir, 1981, p.64)

(20) *Ce meilleur ami de l'homme, comme on le surnomme, ne mord que si on l'y porte.* (Internet)

(21) *Le moyen le plus efficace d'apprendre le japonais me parut d'enseigner le français.* (Amélie Nothomb, *Ni d'Ève ni d'Adam*, Collection Le Livre de Poche, 2000, p.7)

(22) *Je souris à mon tour de mon air le plus convaincant.* (Sylvie Testud,

Gamines, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.115)

- (23) Pour souscrire à *ce moyen le plus efficace* pour nous soutenir, un formulaire est disponible sur notre site internet ou sur simple demande. (Internet)

他の表意単位の実現形を限定する相対最上級形容詞には、被限定項に対して後置される実現形もある。たとえば (21) の *le plus efficace*, (22) の *le plus convaincant*, (23) の *le plus efficace* は、それぞれの被限定項 (*moyen* や *air*) に対して後置されている。このような最上級形容詞後置型名詞連辞のなかで、先頭に *Le*, *Mon*, *Ce* をともなうものを、(Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj. という記号で表現することにしよう。大文字のみを使用した LE は、相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* を表す記号である。

2.2.2. Le, Mon, Ce のステイタス

(Le+Mon+Ce) plus Adj. N.における *Le*, *Mon*, *Ce* はすべて、記号素の実現形である。これらの *Le*, *Mon*, *Ce* の内部には、表意単位の実現形としての境界がないと考えられる (1.3.を参照)。 *Le*, *Mon*, *Ce* の一部分だけを、ゼロ切片も含めて、他の切片と入れ換えることはできないからである (1.2.を参照)。実際 (Le+Mon+Ce) plus Adj. N.において *Le* を *Mon* や *Ce* と入れ換えれば、*Le* の一部分ではなく全体を *Mon* や *Ce* と入れ換えることになる。したがって、たとえば *le pire ennemi* の *le*, *mon pire ennemi* の *mon*, *ce pire ennemi* の *ce* はいずれも、*au* のような連辞の実現形ではなく、記号素の実現形であると考えてよい。

(Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj. において、先頭の *Le*, *Mon*, *Ce* と「LE plus Adj.の LE」は、異なる表意単位の実現形である。両者の間には、表意単位の実現形としての境界がある (1.2.を参照)。実際 (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.では、*Le*, *Mon*, *Ce* を他の切片と入れ換えずに維持したまま、LE plus Adj.を他の切片 (たとえば比較級形容詞、単なる形容詞、ゼロ切片など) と入

れ換えることができ、その入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる。また LE plus Adj.を維持したまま、これらの Le, Mon, Ce を他の表意単位の実現形と入れ換えることもでき、その入れ換えによって発話の知的な意味に変化が生じる。したがって、たとえば (21) における「le moyen の le」と「le plus efficace の le」の間には、表意単位の実現形としての境界があると考えてよい。この二つの le は、それぞれが別個の表意単位の実現形なのである。同様に (22) における mon air le plus convaincant の mon と le は、別個の表意単位の実現形である。(23) における ce moyen le plus efficace の ce と le は、それぞれが異なる表意単位の実現形である。

(Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.の Le, Mon, Ce は、名詞限定辞記号素の実現形である。これらが名詞記号素（あるいは名詞に相当する表意単位）の実現形を限定していることは、自明であると言ってよい。(Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.全体が名詞連辞だからである。実際、この名詞連辞から N.を除去すれば、Le, Mon, Ce も発話から姿を消す。したがって、たとえば (21) における le moyen の le は、moyen に対する限定項である。(22) における mon air の mon は、air に対する限定項である。(23) における ce moyen の ce は、moyen に対する限定項である。

2.2.3. 相対最上級形容詞にみられる条件変異体の関係

(Le+Mon+Ce) plus Adj. N.と (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.から両者の共通部分である N.を除いた残りの部分は、条件変異体の関係にある (1.5.を参照)。すなわち (Le+Mon+Ce) plus Adj. N.から N.を除いた (Le+Mon+Ce) plus Adj. ...と、(Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.から N.を除いた「(Le+Mon+Ce) ... LE plus Adj.」は、形容詞記号素が被限定項に対して前置されるか後置されるかに対応した、条件変異体の関係にある。たとえば (24) の le plus bel endroit から endroit を除いた le plus bel...と (25) の le papa le plus beau から papa の除いた「le ... le plus beau」は、同一の表意単位の実現形で

あると考えてよい。これらの間には、形容詞記号素が被限定項の前に現れるか後ろに現れるかという出現文脈の相違しかないからである (2.2.1.を参照)。

(24) On dit que c'est *le plus bel endroit* du monde. (Tonino Benacquista, *Malavita*, Collection Folio, 2004, p.122)

(25) Il veut être *le papa le plus beau* du monde... (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p. 322)

(26) Elle ébouriffa ses cheveux et lui offrit *son plus beau sourire*. (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.204)

(27) Il arbore *son sourire le plus détendu*, [...]. (Sébastien Japrisot, *Adieu l'ami*, Collection Folio, 1968, p.128)

したがって (Le+Mon+Ce) plus Adj. ... と (Le+Mon+Ce) ... LE plus Adj. から両者の共通部分である plus Adj.を除いた残りの部分もまた、条件変異体の関係にあると考えてよい (1.5.を参照)。すなわち (Le+Mon+Ce) plus Adj.から plus Adj.を除いた残りの Le, Mon, Ce は、(Le+Mon+Ce) ... LE plus Adj.から plus Adj.を除いた残りの「(Le+Mon+Ce) ... LE ...」と条件変異体の関係にある。たとえば (24) の *le plus bel endroit* の *le ...* と (25) の *le papa le plus beau* の「*le ... le ...*」は、条件変異体の関係にあると考えられる。(24) の *le plus bel endroit* において *le* が一つなのは、*bel* が *endroit* に対して前置されているからである。一方 (25) の *le papa le plus beau* に *le* が二つあるのは、*beau* が *papa* に対して後置されているからにほかならない。実際この *beau* を *papa* の前に移動させれば、*le* は一つになる (*le plus beau papa*)。つまり「*le plus bel endroit* の *le*」と「*le papa le plus beau* における二つの *le*」は、同一の表意単位の実現形なのである。これら間で *le* の生起数が異なるのは、形容詞記号素の出現位置が異なるからに過ぎない。同様に (26) の *son* と (27) の「*son* および *le*」についても、当該文脈において条件変異体の関係にあると

考えてよい。

2.2.4. Le, Mon, Ce による機能の兼任

(Le+Mon+Ce) plus Adj. N.における Le, Mon, Ce は, (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj. における「先頭の Le, Mon, Ce」および「LE plus Adj.の LE」を兼任している。(Le+Mon+Ce) plus Adj. N.の Le, Mon, Ce は, 記号素の実現形である (2.2.2.を参照)。また (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.の「先頭の Le, Mon, Ce」と「LE plus Adj.の LE」は, 異なる表意単位の実現形である (2.2.2.を参照)。そして (Le+Mon+Ce) plus Adj.N.における Le, Mon, Ce は, (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.における「(Le+Mon+Ce) ... LE ...」と条件変異体の関係にある (2.2.3.を参照)。これらの事実から, (Le+Mon+Ce) plus Adj.N.における Le, Mon, Ce は, (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj. における「Le, Mon, Ce」と LE を兼任していると考えざるをえない。後者において二つの表意単位がはたしている機能を, 前者では一つの記号素が担っているからである。たとえば「le plus beau papa の le」は「le papa le plus beau における二つの le」を兼任していることになる。

したがって (Le+Mon+Ce) plus Adj. N.における Le, Mon, Ce は, (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.における「先頭の Le, Mon, Ce」であると同時に「LE plus Adj.の LE」でもある。たとえば le plus beau papa の le は, le papa le plus beau における「le papa の le」であると同時に「le plus beau の le」でもある。同様に (26) における son plus beau sourire の son は当該文脈において, (27) における son sourire le plus détendu の son に相当すると同時に, le plus détendu の le にも相当する。

2.2.5. 名詞限定辞の存在証明

(Le+Mon+Ce) plus Adj. N.における Le, Mon, Ce は, 名詞限定辞記号素の実現形である。これらの Le, Mon, Ce が, (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj. において名詞限定辞である Le, Mon, Ce と条件変異体の関係にあるからであ

る (2.2.2. と 2.2.3. を参照). つまり (Le+Mon+Ce) plus Adj. N.における Le, Mon, Ce は, 相対最上級形容詞の一部分であるだけでなく, 名詞記号素 (あるいは名詞に相当する表意単位) に対する限定項でもある (2.2.4. を参照). たとえば (18) における le meilleur ami の le, (19) における notre meilleur ami の notre そして (20) における ce meilleur ami の ce は, すべて名詞限定辞の実現形と考えてよい.

(28) L'accord international sur le changement climatique est le moyen *le plus efficace* de contrer ce danger. (Internet)

(29) Désarmer le peuple est le meilleur et *le plus efficace* moyen de l'asservir. (Internet)

したがって (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.における「LE plus Adj.の LE」は, 名詞限定辞記号素の実現形だと考えられる. (Le+Mon+Ce) plus Adj. N. の Le, Mon, Ce は, (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.における「先頭の Le, Mon, Ce」および「LE plus Adj.の LE」と条件変異体の関係にある (2.2.3. を参照). つまり「LE plus Adj.の LE」は, (Le+Mon+Ce) plus Adj. N.の Le, Mon, Ce と同一の表意単位の実現形なのである (2.2.4. を参照). よって (Le+Mon+Ce) plus Adj. N.の Le, Mon, Ce が名詞限定辞記号素の実現形であれば, それと条件変異体の関係にある (Le+Mon+Ce) N. LE plus Adj.における「LE plus Adj.の LE」もまた, 名詞限定辞記号素の実現形だということにならざるをえない. したがって, (28) における le plus efficace の le は, 名詞限定辞記号素の実現形だと言ってよい. この le が, たとえば (29) の le plus efficace moyen において名詞限定辞記号素の実現形である le と, 条件変異体の関係にあるからである.

2.3. 他の表意単位を限定しない相対最上級形容詞における名詞限定辞

相対最上級形容詞には, 他の表意単位の実現形を直接的に限定しない実現形がある. たとえば (30) の la plus drôle は属詞の位置にあって, 他の表意単位

の実現形を限定していない。一方 (31) の *la plus drôle* は、*personne* を直接的に限定している (2.2.1. を参照)。つまり (30) と (31) の *la plus drôle* は、同形ではあるが、出現文脈が異なるという関係にある (1.5. を参照)。

(30) *Celle-ci n'est pas la plus séduisante, mais elle est la plus drôle de la collection.* (Internet)

(31) *C'est la personne la plus drôle du monde.* (*Elle*, 2 mai 2005, p.134)

(32) *Il est beau, votre frère.* (Fred Vargas, *Sous les vents de Neptune*, Collection J'ai lu, 2004, p.277)

(33) *Il est beau gosse.* (Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.43)

ただし「他の表意単位の実現形を直接的に限定しない相対最上級形容詞」と「他の表意単位の実現形を直接的に限定する相対最上級形容詞」を、異なる表意単位であると考え積極的な根拠はない。実際 (30) の *la plus drôle* と (31) の *la plus drôle* を別物とみなす説得的な理由はないように思われる。たとえば (32) と (33) の *beau* を同一の表意単位の実現形であるとみなすのであれば、(30) と (31) の *la plus drôle* もまた同一の表意単位の実現形であると考えざるをえないだろう。この二つの実現形は形も意味も同一であって、たんに出現する文脈が異なるだけなのである。

この前提を認めるかぎり、他の表意単位の実現形を直接的に限定しない (たとえば属詞位置にある) 相対最上級形容詞の実現形に含まれる *le*, *la*, *les* は、名詞限定辞記号素の実現形だと考えてよい。他の表意単位の実現形を直接的に限定する相対最上級形容詞の一部としての *le*, *la*, *les* が、名詞限定辞記号素の実現形だからである (2.2.5. を参照)。たとえば (30) と (31) の *la plus drôle* が同一の表意単位の実現形であることを前提にしてよければ、(31) の *la plus drôle* の *la* が名詞限定辞記号素の実現形である以上、それと同一の表意単位の実現形である (30) の *la plus drôle* の *la* もまた、名詞限定辞記号素の実

現形とみなしてかまわない。

3. まとめ

相対最上級形容詞の一部としての *le, la, les* は、名詞限定辞記号素の実現形である。たとえば (34) と (35) における *la plus belle* の *la* は両方とも、名詞限定辞記号素の実現形である。そして (35) の *la plus belle* と (36) の *la plus belle* が同一の表意単位の実現形であれば、(36) における *la plus belle* の *la* も名詞限定辞記号素の実現形である。

(34) Elle était *la plus belle femme* du monde. (Sébastien Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.141)

(35) Chaque année le magazine *People* élit *la femme la plus belle* au monde, [...]. (Internet)

(36) [...], elle était *la plus belle des femmes* qu'on ait jamais vues, [...]. (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.299)

この結論は、相対最上級形容詞が条件変異体の関係にある事例を比較することを通して得ることができる。たとえば (34) の *la plus belle femme* から *femme* を除いた残りの *la plus belle ...* と (35) の *la femme la plus belle* から *femme* を除いた残りの「*la ... la plus belle*」は、*belle* が *femme* に対して前置されるか後置されるかによる条件変異体の関係にある。よって、*la plus belle ...* と「*la ... la plus belle*」から共通部分の *plus belle* を除いた残りである (34) の *la ...* と (35) の「*la ... la ...*」もまた、条件変異体の関係にある。(34) と (35) で *la* の生起数が異なるのは、*belle* の出現位置が異なるからに過ぎない。(34) の *la ...* は名詞限定辞記号素の実現形であるから、それと条件変異体の関係にある (35) の「*la ... la ...*」も名詞限定辞記号素の実現形であると考えられない。したがって (35) と (36) の *la plus belle* が同一の表意単位の実現形

であることを前提にすれば, (36) の la を名詞限定辞記号素の実現形とみなしてよいことになる。

参考文献

- ARRIVÉ, M., F. GADET & M. GALMICHE (1986), *La grammaire d'aujourd'hui*, Paris, Flammarion.
- CHEVALIER, J.-C., Cl. BLANCHE-BENVENISITE, M. ARRIVÉ & J. PEYTARD (1964), *Grammaire Larousse du français contemporain*, Larousse.
- 藤田知子 (2005) 「最上級構文論」『木下光一教授喜寿記念論文集』白水社, 217-236.
- 川島浩一郎 (2010) 「定冠詞と人の名前について」『ふらんぼー』35, 東京外国語大学フランス語研究室, 1-18.
- 川島浩一郎 (2011a) 「基数形容詞の前の冠詞について — 定冠詞, 不定冠詞, 部分冠詞の共通部分としての定冠詞 —」『福岡大学人文論叢』42-4, 1203-1216.
- 川島浩一郎 (2011b) 「単数性と非複数性 — 定冠詞・不定冠詞・部分冠詞の共通部分としての定冠詞 —」『ふらんぼー』36, 東京外国語大学フランス語研究室, 17-33.
- 川島浩一郎 (2011c) 「冠詞と都市名について」『福岡大学人文論叢』43-1, 147-159.
- 川島浩一郎 (2011d) 「形容詞の相対最上級における冠詞 — 名詞限定辞の共通部分としての定冠詞 —」『福岡大学人文論叢』43-2, 445-457.
- 川島浩一郎 (2013) 「定冠詞の諸用法の成立基盤 — 名詞限定辞の共通部分としての定冠詞 —」『フランス語をとらえる フランス語学の諸問題 IV』三修社, 183-198.
- MARTINET, A. (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Paris, Didier.
- RIEGEL, M., J.-C. PELLAT & R. RIOUL (1994), *Grammaire méthodique du français*, Paris, PUF.